



T O K Y O R O P P O N G I R O T A R Y C L U B

東京六本木ロータリークラブ



『ロータリーは分かちあいの心』

～Rotary Shares～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年3月10日

No. 27

『一歩一歩進もう』

～Let's Move Forward Step by Step～
東京六本木ロータリークラブ会長

W E E K L Y R E P O R T



平成20年2月25日
卓話 『上賀茂神社と葵』
賀茂別雷神社（上賀茂神社）
権禰宜 村松 晃男 様



京都上賀茂神社の村松でございます。当神社の祭神は賀茂別雷神（かもわけいかづちのかみ）で、水を司る神として数千年昔に上賀茂の地に鎮座になり、国の安泰、人々の幸せ、五穀豊穡を願ってまいりました。昔、この上賀茂は賀茂氏という大きな氏族が治め、賀茂川の水をがっしりと握っていたんですね。江戸時代、京都の皇室、朝廷、所司代の庭に行く水も当神社がコントロールしていました。御所にお客様が見えるからどうか明日水を流してくださいと願いがあっても、まず田畑を潤して余れば水を送りましょうということで、大きな力で水を支配していた様子が伺えます。

今日のタイトルは「上賀茂神社と葵」です。当神社と葵の結びつきは神社に伝わる神話にあります。賀茂氏の始祖、賀茂建角身命（かもたけつぐみのみこと）には玉依日賣（たまよりひめ）というお子さまがありました。玉依日賣が賀茂川で禊ぎをなさっていたある朝、雷とともに一本の赤い矢が空から降りてまいります。玉依日賣は不思議なご縁を感じられて矢を御殿に持って帰られ、夜、寝所の床に置いておやすみになると、その矢の神妙な力によって御懐妊になり、若宮をお生みになります。若宮が成人されたとき、おじいさんは全国から八百万の神を招き祝宴を催しました。おじいさんはこれだけたくさんのお招きしたのだから、この中にきっと父親がいるだろうと思い、若宮に杯を渡してお父さんを見つけるように言いました。若宮は、わが父は天つ神、天にいらっしゃる神であると申され、杯を天に向かって投げ、ご自身も雷とともに消えてしまいます。おじいさんと玉依日賣は大変悲しみ、雷とともに消えた若宮ですから別雷神と名前をつけて戻って欲しいと願われたところ、ある日、玉依日賣の夢に現れ、「我に会わんと欲すれば葵楓（あおいかつら）の蔓（かすら）

で飾り、祭りをし、待てば来む。」とおっしゃいます。

当神社のお祭りで一番有名な葵祭は、今から1450年ほど昔、欽明天皇の御世に賀茂の神様の祟りを鎮めるため、ご神託どおり葵楓の蔓で飾ってお祭りをしたのが起源です。

当時はどこにでもあった葵と桂の葉を使うように神様がおっしゃったのはなぜでしょうか。平安の頃、人々は葵を「あふひ」と呼んでいました。

「ひ」は「魂、心」の意味。すなわち「あふひ」は「魂、心」にめぐり合うための草という意味です。

この葵、今、近くでは見る事ができません。祭りで使う約1万株の葵は人里離れた山奥から用意しますが、年々、奥へ進まないで取れなくなっています。いつか葵祭の5月15日に間に合わないときがくるかもしれない。そこで近くの上賀茂小学校の児童に葵をみんなで育ててくれませんかと声をかけたところ、みなさん賛成して下さって平成18年に運動が始まりました。先生、PTA、草花に詳しい町のおじさん、おばさんが葵を通じて様々なことを子供たちに教え支援する組織ができました。これはぜひ大きくしたいと昨年、葵プロジェクトという会を作りました。今度は4つの小学校400名の児童が参加してくれています。ジャンルを超えたさまざまな方々がネットワークを作ることで人と人のつながりが復活しました。これこそ葵の持つ意味「あふひ」じゃないかと考えています。

これを機会に改めて日本の“自然とともに生きる文化”を世界に示し、また神話どおりの神事を百年、千年後まで伝えることができたら願っています。本日はありがとうございました。

